4

華岡流の麻酔法はなぜ幕末に急速に衰退したのか

松木明知
弘前大学医学部麻酔科学教室

華岡流の医術について、これまで多くの説が提唱されてきたが、しかしいずれの説も正鵠を得ているとは云い難い。これらの説は大きく四つの課題に分類される。第一は青洲自身の事績である。青洲が偉大な医師であったことは知られていたが、正確な業績は不明であった。第二の課題は青洲の門人の実態に関することである。第三は青洲の医術の普及問題についてである。これまで門人の実態が不明であったため、青洲の医術は普及せず、その主な理由は彼が秘密主義を採ったとするものであった。第四の説は青洲の医術が普及したとしても、幕末に急速に衰退したのは青洲の医術が余りにも卓絶して弟子の追従を許さなかったとするものであった。

呉秀三が一九二三年（大正十二）に「華岡青洲先生及其外科」を出版するまで、華岡青洲の門人の正確な数やその地域的な分布などはほとんど知られるところはなかった。呉の著書には一八〇〇余人の門人の名前、出身地とその入門時期が記されている。この呉の研究が契機となって、一九五五年（昭和三〇）から一九七〇年（昭和四五）にかけて全国各地の門人の事績が発掘されるようになった。

それにも拘わらず華岡流の医術は全国的に普及しなかったとする医学史の研究者が大多数を占めた。華岡流の医術が最も得意とした全身麻酔下の手術が行われた形跡が何もないというのがその主な理由であった。

演者は青洲の全身麻酔法が普及しなかったのではなくして、普及したことが発掘されていないと考えて研究し、津軽の三上道隆、福井の橋本左内、熊本の進藤寛策らによる全身麻酔の施行を発掘した。また岐阜地方では不破父子によって八十数例の乳癌手術が行われたことが明らかになった。これによって華岡流の医術は普及されなかったのではなくて、普及したがその事

績が発掘されなかったという演者の推定が証明されたと考えられる。

普及しなかった理由についても、従来の有力な説は青洲が秘密主義と採ったからとするが、これは誤りである。青洲が麻沸散の処方を秘密にしたのは、弟子から弟子への安易な普及によって乱用され、重篤な合併症を招き死者の山を築くことを未然に予防したことは明らかである。

華岡流の医術に関してさらなる誤った説は華岡流の医術が発展せず、幕末に急速に衰退したのは秘密主義を採ったとする小川鼎三の説で、彼は「医学の歴史」の中で「青洲の全身麻酔法が欧米に先んじていながらその後の発展をみなかったのは、その方法を公開せず、秘伝として子孫や高弟にのみ教える傾向があったためである。」としている。また藤野恒三郎は「日本近代医学の歩み」のなかで華岡流の医術に関連して「青洲の外科学は絶妙であったからこそ弟子の数は三千人に及び、日本医学史に大きく輝いたが、それは彗星の如く消えた。青洲の技術が後進によって継承され得ないほどの絶妙さの故に消滅したのではなかろうか？」と記しているが、この藤野の推察は明らかに誤りである。

門人によって記録された図録を見ても、青洲の手術は弟子が真似を出来ないほどの絶妙なものではなく、その最も得意とした麻沸散による全身麻酔法が応用性、調節性、適切性に欠けており、時代の要請に応えることが出来なかったためである。

華岡青洲や華岡流の医術について多くの述がみられるが、小川鼎三や藤野恒三郎の影響をうけて誤った見解を展開している。これらを改める時期に来ていると思う。